

小中学生の野外活動に関する課題と方向性 ～特にプログラム展開を中心に～

○森 孝昭 (横浜市立菊名小学校)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)

キーワード：個、選択プログラム、人間交流、野外活動化、カフェテリア型プログラム¹⁾

I. はじめに

小中学生を対象とする野外活動は、プログラムの中に、全体や班によって活動する形態を多く取り入れている。特にグループ活動を重視した場合にその頻度は高い。小中学生の組織的(organized)な野外活動を企画する視点は、自然に対する理解はもとより、自主性や協調性など様々な体験を通して、人間交流の方法を学ぶことを目的とした局面では、むしろ野外活動を手段として活用している。野外活動における小中学生の活動形態を観察すると、近年、グループ内での人間関係作りの難しさを実感し問題(悩み)を訴える子どもが多い。このように人間関係作りが大変になってきた背景として、次のような事柄が主な理由として挙げられる：①現代の子供は、情報過多による疑似体験は多いが、実際の経験が少ない、いわゆる“体験不足である”，②集団的能力を欠き、孤立的傾向を帯びたり、集団埋没型の傾向を強めてきている，③表現力や実践力を欠いているなどである。これらの問題点(課題)を解決していくためにも、野外活動を時には目的化、時には手段化し、実体験(実践)としてプログラムの提起をすることが重要であり、このことが野外活動の一層の価値を付加していくことになる。人間交流が必須となる集団行動を核として行う野外活動では、一日の生活時間の中で生活班や全体で活動することが多くなり、ややもすると、班の中での人間関係の善し悪しが、その個人の野外活動全体に対する評価を左右する。この事実は、3泊4日という短期間の野外活動(キャンプ)においてもいえることである。初めて顔を合わせる子供たちが、活発にそして順調に人間交流を実現していくためには、活動の開始期から、班の結束を固めたり、班への所属感を高めたりすることが、重要である。そして、班の人間関係をよい状態で進行させることが必要である。子供たちにとって、常に他人がいるという関係は、緊張するものである。その緊張関係が時間と共によい方向へ向かえば、身体的、精神的疲れも問題を提起するまでにはいたらない。プログラム展開の工夫により、人間交流(集団活動)を求めつつも、個を生かす個人プログラムの活用により、個人がより主体となれる活動を効果的に取り入れることが、組織的な野外活動の中で必要と考えられる。ここでは、東京都板橋区にある「財団法人伊藤忠記念財団東京小中学生センター」のウインターキャンプを取り上げ事例研究として考察した。

II. 研究の目的

財団法人伊藤忠記念財団東京小中学生センターにおいて実施されているウインターキャンプの事例研究をし、個を生かす選択プログラムの開発をするに当たり、現在実施されているプログラムの中に存在している諸課題の抽出を行い、課題解決と共によりよい方向性を探ることを目的とする。

Ⅲ. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、1993年、1994年のウインターキャンププログラムにおいて実施された、個人別選択プログラムの資料を基礎にその内容と運営の分析をする。

Ⅳ. 分析の内容

分析については次のとおりである。

(カッコ内“() []”は、プログラム表*への略記表示を意味する)

1. プログラム内容の分析 ----- [内]
 - 1) 全体の間人交流を高める内容 (全)
 - 2) 班の間人交流を高める内容 (班)
 - 3) 個を生かす内容 (個)
 - 4) 活動を楽しむ内容 (活)
2. プログラム運営の分析 ----- [運]
 - 1) リーダー中心型 (リ)
 - 2) リーダー準備班単位実行型 (班)
 - 3) リーダー準備個人単位実行型 (個)
 - 4) メンバー自主運営型 (自)

3. 分析事例

事例プログラム 第17回 ジュニア・ウインタースクール

主催 財団法人 伊藤忠記念財団 東京小中学生センター

趣旨 雄大な冬の自然を誇る那須高原を教室にし、野外プログラムを中心に年齢の異なる仲間と愉快で規律ある共同生活をおくる。日常ではなかなか味わうことのできないこれらの新しい体験を通じ、たくましい心と体をつくり協力の方法や基本的な生活習慣を楽しく学ぶ機会とする。

日程 1993年12月25日(土)～28日(火) 3泊4日

実習地 国立那須甲子少年自然の家(福島県西白河郡西郷村)

参加対象 小学校4年生以上中学3年生までの男女

募集人数 180名(一般募集)

ねらい

- ・グループ活動を通して自主性と協調性の在り方を、実際に学ぶ。
- ・全プログラムを通して生活指導に重点を置く。
- ・冬の野外活動を通し、何でもやってみようとする意欲を養う。
- ・楽しいプログラム運営によって新しい体験をし、上手下手を問わず成し遂げた喜びを設定する。
- ・スキーや雪上活動の基本的な技術指導をする。

現地実習の前に事前講習会を12月12日(日)に実施した。そこでは、オリエンテーション、班別会議、保護者会を行った。

※プログラム表 (内容の一部省略があるが、全プログラムは資料に掲載する)

	現地実習1 (12月25日)	内容	運営	現地実習2 (12月26日)	内	運		
9	集 合 車中 レクリエーション	内容の 分析	運営の 分析	スキー	活	リ		
10								
11								
12				昼食・休憩				
13				スキー	班	リ		
14								
15				全	リ	班別会議	班	自
16				班	活			
17				全	リ	夕食・入浴	班	自
18				到着・入所式・夕食	全	リ	フレンドシップナイト	全
19	オリエンテーション							
20	ナイトウオークラリー	班	リ					
21	班別会議	班	自	班別会議	班	リ		

	現地実習3 (12月27日)	内	運	現地実習4 (12月28日)	内	運	
9	個人別選択プログラム	個	個	アドベンチャーゲーム	全	リ	
10							
11	昼食・休憩			昼食・休憩	班	自	
12							
13	個人別選択プログラム			退所式	全	リ	
14	係会議 班活動タイム 夕食・入浴	班	班	出発・車中 レクリエーション 感想発表 帰着・解散	全	リ	
15							
16							活
17							自
18							
19	さよならキャンプファイヤー	全	リ				
20							
21	班別会議	班	班				

今回の「個人別選択プログラム」は、7つのプログラムが用意され、下記の内容で実施された。

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1) 「歌はすばらしい」～みんなで歌おう、ゆかいに歌おう～ | 参加63名 |
| 2) 「焼き板作り」～木の目がきれいな、いかしたかざり～ | 参加47名 |
| 3) 「かっぱの手と知恵の輪作り」～竹で作る摩訶不思議なしかけ～ | 参加17名 |
| 4) 「幸福を呼ぶメキシカンクロス」～ちょっといかしたマクラメ細工～ | 参加23名 |
| 5) 「ユーモアマジック」～秘技伝授、驚異のマジカルワールド～ | 参加6名 |
| 6) 「とことん雪遊び隊」～突撃、雪上大作戦～ | 参加16名 |
| 7) 「わいわい探検隊」～進め、進め、どこまでも～ | 参加24名 |

V. 考察

個人別選択プログラムの効果として：

- ①プログラムの参加について、自己決定が行われた
- ②自己決定が行われたことにより、より積極的にそのプログラムに参加できた
- ③いくつかのプログラムの中から、自分がしたいもの（カフェテリア型プログラム）を選択したという事は、その活動の中で、自己表現力がより多く発揮できた
- ④個人別選択プログラムでは、他のプログラムの活動と自分の行っている活動とを比較することがないため、比較から起きる不安感などが生じることがなく、自分のプログラムに打ち込むことができた
- ⑤全体の前で、個人別選択プログラムの発表の場を設定することにより、自己表現力や新しい仲間との交流が生まれた
- ⑥個人別選択プログラムを終え、班の中でお互いの情報交換が盛んに行われることにより、班の人間関係がより円満・円滑になった
- ⑦個人別選択プログラムの中で一人一人の個性が発揮されることを意図したことにより、お互いに認め合うようになった。

個人別選択プログラムの問題点として：

- ①人数調整の問題、またそこには、自分の希望がかなえられなかった子どもの問題やプログラムによって人数に偏りがでた場合の問題
- ②数多くのプログラムを指導する指導者の確保の問題
- ③子どもの希望に添った内容のプログラムを用意することの問題。

以上のように個々に応じたプログラムを準備し、運営することの難しさを有するがこれからの野外活動を考えるとき、今まで以上に「個人」「個性」を生かす視点をもってプログラムを展開していく必要があるといえる。

個人別選択プログラム活用の方向性を模索し、小中学生の野外活動をより効果的に運営するためには：

- ①プログラムの中に、全体・班別・個人の活動を効果的に組み合わせていくようにする
- ②①の活動をより効果的にするためには、個人別選択プログラムの特色をよく理解し適切に活用することによって、活動全体に減り張りをつけていくようにする
- ③常に参加者の実態を把握し、個々の希望に応じたプログラムを設定することにより一人一人の満足度を高めていくようにする
- ④野外活動を通して、子どもたちにどのような力を付けたいのかということを目的に掲げ、その具体的目標を明確に設定して、個人別選択プログラムを展開すべきであることが考察できた。

本事例では、活動の開始期には、全体と班の活動を中心とし、参加者の結束や所属感を高めた。そして、後半に個の活動を導入することにより、幅の広い人間交流に取り組むことができた。このように、全体・班・個の組み合わせを適切に実施することによって、活動がより主体的になり、いわゆる“より野外活動化”するといえる。

<引用文献>

- 1) 鈴木秀雄『セラピューティックレクリエーション』不味堂出版、1995、p.103.